



トンゴシの話

※高鍋昔話第1集に、「洗橋のチンジョキジョキ」の怪談が出ましたので、今度は持田の「お崎のはな」のトンゴシの番です。

坂本村の東、「お崎のはな」という所は、昔から「トンゴシ」がよく出る所で、夜になると皆こわがって通らないくらいでした。

幅2m位のせまい路が、がけの下を曲りくねって通っていて、大昔の人の横穴古墳のお墓か、昔の人々の住居跡だろうと、中に入って見るのもこわく、その上のがけには松の大木や雑木林がおおいかがぶさっていて、路の片がけには松の田んぼにひく井手が流れていて、昼間でも薄気味悪く、近くには家はなく、これがかかった茅ぶきの水車小屋がただ1軒、「ザブザブザブ、ギーッゴットン」とまわっていて、米や麦をはがしていたのだそうですが、時々白髪のお婆さんが、お米や小豆などを、「ゴシゴシ、ゴシゴシ」といっていたそうで、悪口など言っていると、おっかけて来ていたのだそうです。

ある晩、村の青年が2人通りがかって、「今もトンゴシはばかりやるとかい」と冗談をいいながら、中をのぞいたところ、「今もおります、トンゴシトンゴシ」といって見上げた白髪の婆さん、目は月の光をうけてぎらぎら光り、口は耳の下までさけている山ン婆。びっくりぎょうてんの青年、すっかり腰をぬかして、路をほうのようにして逃げ帰ったが、「今もおります、トンゴシトンゴシ」と追っかけて来たそうです。まだ小学生だった私は、課外で暗くなって1人ぼっちで帰る時は、カバンをおさえ、ぞうりのかかとが「パタパタ」音がせぬよう、足音をしのばせて水車のそばを通り、過ぎると後はいちもくさん、後も見ずに走ったものです。

大正年間で、ここを通るほかに道はなかったのです。

（採話：家床地区 永友千秋）

※たかなべ伝・伝 Returns④にて掲載





MAP



子供の頃

※現在の高鍋東小学校
高鍋尋常小学校に入学したのが大正4年4月、今から70余年も昔のことです。

その頃の児童は、かすり 紺や縞の木綿の着物にわら草履ぞうりを履き（草履は1銭5厘か2銭位だった）勉強道具は風呂敷に包み、雨の日ははだしで永谷とか水谷原・太平寺等遠方からでも歩いて通学しておりました。

男の先生方が大部分で、黒色の詰襟えりの洋服、女の先生は着物に袴姿はかまでした。

先生はとても厳しく怖い存在で、先生の言い付けなら絶対服従といった具合でした。

反面とても親切で優しく勉強の遅れた者は放課後残して教えてくださったものでした。



その頃は足洗い場というのがあって、そこに溜めてある水で、体操の時などはだしになったときは足を洗って教室へあがるのでした。

寒い冬の日などは、ひびがきれて血のにじむようなことも度々ありました。

家庭では、低学年の子供は自分専用の机も無く、飯台（テーブル）の上で宿題をしたり、畳の上にはらばつて本をよんだりといった具合でした。

持っている本といえば学校の教科書位のもので、雑誌その他の本などはなかなか買ってもらったこともできませんでした。したがって学校から帰ると遊ぶことだけが楽しみで遊び道具もいろいろと苦心して作ったものです。

手作りの道具はもちろんのこと、遊び道具は空き箱や布の端切れ・欠



けた茶碗・皿・棒切れでも大事な大事な宝物だったものです。

この道具で遊ぶことが楽しくて面白くて時間の過ぎるのも忘れ、帰りが遅いといつてよく叱られたものです。

明治・大正・昭和の時代を生き平成の時代を迎え、昔を振り返ってみると、まるで夢のようですし、今の子供達にはこのような昔の話聞かせても信じてもらえないものでしょうか。今の子供達のうらやましいような生活状況は昔の子供達には想像もできなかったことです。

（採話：道具小路南地区 松岡美也）

